

## 詩篇108篇6節 「愛された者」

### 1A 自分に向けられた神の愛

1B 正しい人より愛された者

2B 罪人のために死ぬ愛

3B 神への愛、兄弟への愛

### 2A 神による救い

#### 本文

詩篇 108 篇を開いてください。聖書通読の学びは、今、詩編 104 篇まで来ました。本日、午後礼拝で 105-108 篇まで読みたいと思います。今朝は、108 篇 6 節に注目したいと思います。「**あなたの愛する者が助け出されるために、あなたの右の手で救ってください。そして私に答えてください。**」

この詩篇は、ダビデが歌っているものです。ダビデが、周囲の国々から攻められて戦っている時の話です。ダビデはペリシテ人とモアブ人を屈服させました。けれども、北からアラム、現代のシリアから攻撃を受けました。それで戦いました。ところが、死海の南にあるエドムから攻撃を受けたのです。それで、イスラエルの民に動揺が広がりました。主にある戦いを戦っているのに、どうしてこのような窮地に立たされたのか、そのように主が自分たちを思っていないのではないかという思いが、ダビデにはよぎったのでしょう。そこで祈ったのが、この祈りでした。「**あなたの愛する者が助け出されるために、あなたの右の手で救ってください。**」ダビデが、自分のことを愛されている者と言って、それで神が助けてくださる、救ってくださることを確信し、また強く神に願っています。愛されているという保障があるから、神が救ってくださると確かに信じることができます。

### 1A 自分に向けられた神の愛

自分のことを思い出します。しばしば、説教の中で「信仰生活には図々しさが必要である。」と話していますが、その図々しさとは自分が愛されていると大胆に信じることです。自分は、大学受験の直前に、その圧迫から精神的に何らかの衝撃を受けました。入学はしたのですが、そこから自分が立ち直るためにいろいろな努力を行いました。それで、サークルでひと肌脱ごうと思ったのですが、その頑張りが仇となって協調性のない学生となってしまいました。それで仲間に嫌がられ、批判されて、ひどく落ち込んだのです。しかし、大学一年生のクリスマスの時に、地元の教会の礼拝に出た後に、自宅の自室で、「神さま、私はこれまであなたのことを無視していました。」と祈った時、頭のとっぺんから足の先まで、こんな惨めな、恥ずかしい自分をすっぱり受け入れてくださった神の愛に満たされたのです。そこから、一歩ずつ神の愛を確かめる生活を始めることとなりました。

それで、数年後には、ほとんど安定していました。ところが、何年経っても、大学受験の直前に、

入試で合格できそうもないという場面で終わる夢を見て、目が覚めることが多かったのです。夢が覚めて、自分は大学に入学できたところか、とっくの昔に卒業したという事実を確かめないといけなぐらい生々しいものでした。これでは、自分がクリスチャンになる前と同じ状態ではないか、これでは自分は救われていないのではないかと普通に考えたら、そうなのですが、図々しくも、「それでも私は神に愛されている。」とっていました。どうしようもないクリスチャン、これでは証しになっていないのではないかと引け目を感じていたクリスチャンでしたが、神に愛されているという確信だけは、とことん信じつづけたのです。ヤコブが、あれだけハチャメチャな人生を送っても、「わたしはヤコブを愛した。エサウを憎み(マラキ 1:2-3)」と言われる主の言葉のように生きてきました。

### 1B 正しい人より愛された者

実に、ダビデという名前が、「愛された者」という意味でした。多くの人は、彼が正しい人だったのかどうなのか、という判断基準で彼を量ります。彼が正しいかどうかという基準であれば、彼はいろいろな場面で失敗しました。しかし、彼は民に愛されていました。民に愛されているその愛によって、ダビデは尊敬を受けていました。それで、彼に忠誠を尽くす勇士たちが彼の回りにいました。それはダビデが正しいからではなく、ダビデが神に愛されており、その彼の周りにいれば神の愛の共同体の中に自分もいることを確認できたからです。

それはもちろん、彼が神の義をないがしろにしたということでは決してありません。むしろ、愛されていた確信があったからこそ、彼は罪を犯した時に神の裁きの正しさを受け入れ、へりくだり、悔い改めることができました。「詩篇 51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」彼は、自分を愛しておられる主を罪によって傷つけた、このことに対する深い後悔がありました。主に愛されているという確信があったからこそ、神の正しさを第一にして追い求めることができました。

ダニエルも、同じでした。あのよう、非の打ちどころのないと言われたダニエルをしても、主ご自身であろうと思われる、使いが彼の前に現われた時に、彼は死んだ者のようにになりました。彼は倒れてしまって、気を失いそうになっていましたが、主の使いは何度もこうやって励ましたのです。「10:19 「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこう言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ。お話してください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」愛されている、神に愛されているという保障を与え励ましたので、ダニエルは力を得て、終わりの日に起こる大きな戦についての幻を見ても、それに耐えることができました。ダビデを見ても、ダニエルを見ても、愛されている、神に愛されているという保障があったからこそ、主を畏れ敬って生きることができたのです。

愛される、という保障ほど今日、必要とされているものはないでしょう。愛されていることは、実に

私たちの肉体の生命をも生かしていることを、昔の実験で証明されています。フリードリヒ二世という王がかつてヨーロッパにいましたが、人体実験をしました。教育を受けていない子供が最初に話す言語を知るため、乳母と看護師に授乳している赤子に向かって何も話さないように命じた実験です。しかし、育ての親から愛情を与えられなかった赤子たちは全て死にました。物理的に食事を与えても、スキンシップがなかったり、また言葉をかけることがなければ、精神的な損傷が与えられるだけでなく、この肉体の生命をも失われてしまうのです。

私たちは、神に愛されています。そして御子イエス・キリストによって愛されています。実は、御子であるキリストご自身が父なる神から愛されており、その愛によって御子は御父に従っておられました。イエス様が水のバプテスマを受けられ、水から上がってくる時に、天から声がしました。「あなたは、わたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。(マルコ 1:11)」イエス様は父の愛を受けたその愛によって、父と一体になり、この方が行われることを行い、語られることを語り、一つになっておられました。御父と御子の愛をもって、神は私たちを愛しておられます。

そして使徒ヨハネは、この神の愛によってキリストが自分を他の使徒たちよりも、愛されていたのだということを言いたげなことを福音書の中で話しています。「主の愛されたあの弟子(21:7)」と語っています。そして、ペテロよりも自分がもっとイエス様に近いように仕草をします。例えば、イエス様がよみがえられた後の空の墓のことを、女たちから聞いて、ペテロとヨハネが一目散に走っていきましたが、「もうひとりの弟子がペテロより早かったので、先に墓に着いた。(20:3)」と語っています！興味深いですね。

主の愛は個人的なものです。主は全ての人を愛しておられますが、その愛を受けている本人は、自分が他の人よりもっと愛されていると感じています。神の愛は、数億トンある愛からそれを配分して、数億人いる人々に分け与え、クリスチャンにしているではありません。その数億トンある愛を、数億トンのままたった一人に注ぎ込むことができになるのです。量ではなく、質なのです。キリストの愛に満たされた神の人の近くにいれば、そのように感じます。私が聞いていて、正直嫌だなと思ったのは、「牧者チャックは、私にこう言った。」と言って、それを主張する人たちです。その間で、どちらも「チャックがこのように言った。」と言いながら意見を対立させます。彼は、何が正しいかで話しているのではなく、その個々人を気にかけて話しているので、その二つを合わせるとただ矛盾してしまうだけなのです。愛というのは、その人だけに注がれているという密度の濃いものなのです。

ですから、愛は時に異常な行為に走らせます。イエス様は、九十九匹を置いて、一匹の失われた羊を捜していった羊飼いの話をされました。計算したら、九十九対一であり、九十九を守るほうが得策なのです。しばしば、世界宣教において日本は宣教の墓場だという言い方がされます。救われた皆さんは、あまり意識しないかもしれませんが、世界には数多くの、たくさん人々が救われてその国民の大きな割合でキリスト者になっているところがあります。中南米がそうですし、アフリ

力がそうですし、そしてお隣の韓国や中国もそうです。けれども、日本は同じようにたくさんのエネルギーを宣教に費やしているのに、目に見える成果がない。そういうことで、「墓場」という言葉を使うのですが、私は、そこに神の愛を見ることはできません。神は計算しないのです。わずかな人数でもその人たちのために、時間を費やす方であります。

## 2B 罪人のために死ぬ愛

そして、その愛はどのような形で表れたのでしょうか。私たちは、いろいろな形で愛というものを感ずますが、新約聖書は、こんなにはっきりしたものはないと思われるほど、その愛の現われをはっきりさせています。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。(ローマ 5:8)」私たちが罪人であった時のために、その罪人のために神はご自分の御子を死に渡されました。そこに愛があります。誰かのために死ぬ時に、その人が自分に良くしてくれたからという理由だったら、また何もしてくれなくとも、自分がその人から嫌な思いをしているいなければ、もしかしたら勇気を出して代わりに死ぬことができるかもしれません。けれども、自分に罪を犯した人、極悪人のために死ぬのでしょうか？神は喜んで、そのような私たちのためにご自身の子をお捧げになりました。

それから、こうもあります。「1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」私たちは、誰かに愛される時に自分がその人を愛したから愛されます。相互関係があります。けれども、神の愛は違います。私たちが神を愛していないのに、神は愛してくださいました。無条件の愛です。その無条件の愛を知ったから、神を愛しますが、自分が愛しているから神に愛されているのではないのです。そして、「宥めの供え物」とあります。私たちが罪を犯し、その罪のために神の怒りをこの身に受けなければいけません。けれども、キリストは十字架の上でその怒りを代わりに受けてくださいました。

ということは、私たちは神の無条件の愛を受け入れなければいけません。「無条件の愛であれば、それはもちろん受け入れられます。」と言われるかもしれませんが、けれども、実は無条件の愛を受け入れていない場合が多々あります。「あなたが愛してくださるのならば、私もその一部を受け入れます。」というような受け入れ方をしています。神は、私の罪深さ、その醜さ、過去の行なった恐ろしいこと、恥ずかしくて人には決していえないこと、その負い目を全て知っておられて、そのありのままの姿でわたしのところに来なさい、あなたを受け入れますと仰っているのです。

多くの人が、自分のありのままの、その汚い姿で神のところに行くのを拒みます。自分のものは自分の内にしまっておいて、自分の一部だけを見せながら神の前に出てきて、その愛を受け入れようとします。「自分が否定されるのが怖い。」「自分が罪人とされるのは我慢できない。」「自分が罪を持ったままであることを認めたら、自分を失ってしまう。」そういつて、自分の本当に負い目になっている部分は見せないで、神の前に行こうとするのです。「ありのままの自分のままでいたい」

と言いながら、実はありのままの自分を神の前に出しておらず、偽りの自分のままに留まっているのです。そうすると、それは無条件の愛ではなくなるのです。条件付きの愛に、勝手に自分自身の中で仕立て上げてしまうのです。そして自分で作っている規則の中で生きています。放蕩息子の兄が、父の好意を受けていないと感じて腹を立てましたが、父は、「私のものは、全部おまえのものだ。(ルカ 15:32)」と言いました。この神の寛大さと恵みの豊かさに浴することをせず、心が神から遠く離れていることにあります。

### 3B 神への愛、兄弟への愛

人間に対しては、確かに警戒が必要かもしれません。しかし、神は人ではありません。神には心を明け渡すことができます。神は異常なほどの愛を持っておられます。九十九匹を置いて一匹を捜す愛を持っておられます。この方の愛に心を明け渡すなら、すべてが変わります。その愛を無感動のまま留まらせることはできません。その愛は自分の心の内で爆発し、その泉から留まることを知らない無尽蔵の水となって自分の内から出てくるのです。

神の無条件の愛を受け入れた人は、必ず、神を愛して、神の戒めを守ります。イエス様は、「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。(ヨハネ 15:10)」と言われました。戒めを守っていることによって、イエス様の愛に留まっていることとなります。イエス様の愛に留まっているのなら、その命令を守っているのです。キリストの命令とこの方への愛は、切っても切り離すことはできません。しばしば、「私は神の命令を守ることができません。」と言います。それは命令を守れないという能力の欠如ではなく、そこにあるキリストの愛に留まっていないことから起こっています。

キリストの愛に留まるのは、その愛を受け入れないようにさせている、自我があるからです。自分自身を捨てられていないからです。キリストの愛の中にいれば、自分を忘れます。自分がどうなってもいいのです。何か自分が好きなことをしている時に、時間を忘れ、我を忘れていきますね。自分がそれをしているということさえ意識していません。それが神の愛に満たされた人の状態です。主が命じられていることを行なうことが喜びになっており、自分がどうなろうが勝手にあり、忘れていくのです。

そして、神の愛に留まっている時は、神を愛するだけでなく、神によって生まれた兄弟をも愛します。「1ヨハネ 4:19-21 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」神の愛に留まっているなら、必ず神が愛されているその兄弟を愛するはずですが、それができていないということは、自分がいくら神を愛していると言っても、自分を偽り者とすることです。神を愛しているから、だから自分は頑張って兄弟も加えて愛さないとはいけない、ということではありません。神に愛されていることが分かれば、神を愛するし、同じ

ように神に愛されている兄弟をも愛するのです。

ですから、私たちは不道德な女から多くを学ぶことができます。彼女は、パリサイ人シモンの家で食事を取られていたイエス様の足のところに行き、涙でその足を濡らし、髪の毛で拭き、口づけをして香油を塗りました。彼女にとって、自分の罪が赦されたことについての感謝と愛の表現がそういうものでした。イエス様は、これをシモンが食事をしてもてなしていても、そこに愛がないことを指摘して比較されました。当時は客の足を家の者が洗いますがそれをシモンはしませんでした。口づけもせず、香油も塗りませんでした。確かに裕福な家であったかもしれませんが、そこに愛から来る尊敬の思いは見当たりませんでした。しかし、みすぼらしく見えてもイエス様の心を満たしたのは、この女の愛の行為だったのです。それで、こう言われました。「ルカ 7:47 この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」自分が神に対して、また兄弟姉妹に対してシモンのようになっていしまっているか、それとも女のような強烈な感謝と尊敬と愛を持っているか、確かめる必要があります。

## 2A 神による救い

本文に戻ってみましょう。詩篇 108 篇 6 節で、愛する者が助け出されるために、あなたの右の手で救ってください、と祈り求めています。主は、あなたにイスラムも、そしてモアブもエドムも与えようと約束されます。けれどもダビデはさらに、「あなたは、私を拒まれたではありませんか。」と言います。つまり、「あなたが私を愛しておられるのですから、エドムから私たちを救ってください。」と言っているのです。12-13 節を読んでみましょう。「どうか敵から私たちを助けてください。まことに、人の救いはむなしいものです。神によって、私たちは力ある働きをします。神が私たちの敵を踏みつけられます。」

ダビデは、他の同盟国から助けを得て、エドムを倒すという選択肢もあったのででしょう。けれども、それは人の救いであって空しいものだと言っています。力ある働きをするのは、神によってだからこそ行なうのだ、そして神がその敵を踏みつけてくださるのだ、と言っています。神は、私たちが神に愛されるという保障を与えることによって、ご自分の救いの業を与えてくださいます。先ほどの私自身の証しで言えば、まだ入試直前の悪夢を見ても、「それでも神に愛されている」と決め込みました。すると、神が私の心を癒してくださいました。

神はご自分を愛しておられる者に、ご自身の助けを与えてくださいます。フィラデルフィアにある教会は、不信者のユダヤ人から迫害を受けていましたが、イエス様が彼らにこのように約束されます。「黙示 3:9 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうではなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。」この迫害している者たちから神が救いを与えられることによって、神が彼らを愛しておられることを知らせてくださいます。神は私たちを愛しておられるのだから、私たちに勝利を与えてくださいます。「ローマ 8:35-37 私たちをキリストの愛から引

き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」神に愛された者、その保証が、私たちが神に拠り頼ませ、そして神が救ってくださるのです。

人の救いは空しいです。ユダの王にアサという人がいましたが、彼はエチオピアから来た軍勢に対して、主の御名によって戦いました。彼らは圧倒的な軍力でありましたが、彼はこう言ったのです。「歴代誌第二 14:11 主よ。力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。私たちの神、主よ。私たちが助けてください。私たちはあなたに拠り頼み、御名によってこの大軍に当たります。主よ。あなたは私たちの神です。人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」そして大勝利を収めました。

しかし、何年も経ってから、北イスラエルの王がユダに攻めてきました。その時アサは、なんとシリヤの王に援軍を依頼して、彼らによって倒してもらったのです。ユダには財力もありますから、それで事足りたのです。確かに、うまくいったのです。北イスラエルは攻めてこなくなりました。しかし、それが目的なのでしょうか？そうではない、主が私を愛しておられ、主が私を救ってくださる、この信仰がなければ、同じ結果が出たとしても空しいのです。アサは悔い改めることなく、病気になっても医者にも拠り頼み、主に求めようともしませんでした。

私たちは、問題をなくすことを信仰の目的にするものではありません。キリストが確かに私たちが愛しておられることを知る事が信仰の目的です。主を知ることそのものが、永遠の命です。ある時、ツイッターでこんなことを言っている人がいました。「世の中には問題が多くて、愛と平和を必要としている。だからイエス・キリストが必要だが、問題がなくなり愛と平和が人々に取り戻されたら、キリストはいなくてもよい。」問題がなくなることが目標になっているので、なくなればキリストはいなくなってもいいということなのです！しかし、この人のことを笑えません。天は完全なところだから、私たちも完璧にされているから、どうしてキリストにすぎる必要はあるの？という思いを持っているならば、キリストは自分にとって手段となっており、目的になっていない証拠です。いいえ、信仰と希望と愛は、いつまでも残ります。私たちは今、キリストを必要としていて、将来もキリストを必要としています。キリストを信じ、キリストに望みをかけ、キリストを愛します。キリストの愛を知ること、それが私たちの永久の目標なのです。

最後にユダの手紙 21 節を読みます。「神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」